

「痛みを伴う笑い」と共感のありか

埴幸枝（成城大学）

昨今、バラエティ番組をめぐって、「痛みを伴う笑い」とコンプライアンスの問題が取り沙汰されている。他方で、そこでの「笑い」や「痛み」が何を意味するのか、といったことは曖昧なままである。本発表では、2022 年 4 月に呈された BPO（放送倫理・番組向上機構）の「『痛みを伴うことを笑いの対象とするバラエティー』に関する見解」をめぐる一連の経緯を事例として、「痛みを伴う笑い」の問題が「いじめの助長」や「共感性の疎外」を論点とすることに着目し、「共感」の観点から「笑い」という事象を捉え直す。

ホップズやベルクソンの研究をはじめ、かねてより「笑い」は「理性的なもの（反共感的で攻撃的なもの）」「感情とは相容れないもの」と見なされてきた。しかし、「笑い」が前意味的なものでありうる可能性や、感性的な領域とつながりをもちうる可能性に目を配り、「痛みを伴う笑い」がじつは「共感」を含む感性的領域とも近接的であることを探りたい。

参考文献：

- スロート, M. (2021) 『[ケアの倫理と共感](#)』早川正祐・松田一郎訳、勁草書房
埴幸枝 (2018) 『[障害者と笑い—障害をめぐるコミュニケーションを拓く](#)』新曜社
ベルクソン, H. (2006) 『[笑い](#)』林達夫訳、岩波書店
放送倫理・番組向上機構（BPO）放送と青少年に関する委員会（2022）『[『痛みを伴うことを笑いの対象とするバラエティー』に関する見解](#)』（2022 年 8 月 31 日閲覧）
ホップズ, T. (2012) 『[人間論](#)』本田裕志訳、京都大学学術出版会